

BESSHI 住友別子病院広報誌

SMILE

2026.07
Vol.218



特集：諦めない、脳卒中



諦めない、脳卒中 早期受診とチーム医療が未来を変える力になります!(DSA室での写真)

脳卒中かな?と思ったら

— 迅速な対応とチーム医療が支える回復への道 —

脳神経外科 医長 菅原 千明

脳卒中は、ある日突然発症する病気です。脳の血管が詰まる「脳梗塞」、血管が破れる「脳出血」や「くも膜下出血」などがあり、日本人の主要な死因の一つであるとともに、介護が必要となる大きな原因にもなっています。

しかし近年は医療技術の進歩により、多くの患者さんが回復し、自宅や社会へ復帰できるようになっています。

◆まず大切なのは“迅速な対応”

脳卒中治療では、「Time is Brain(時は脳なり)」という言葉が広く知られています。脳の細胞は血流が途絶えると時間とともに障害を受けるため、一刻も早く治療を開始することが重要です。

脳卒中のサインは「FAST」で覚えることができます。(図1)

実際に救急を受け入れてからの流れはとにかく迅速さが大事です。それにはチーム連携が重要です。(図2)

脳卒中のサインは「FAST」で覚えましょう!

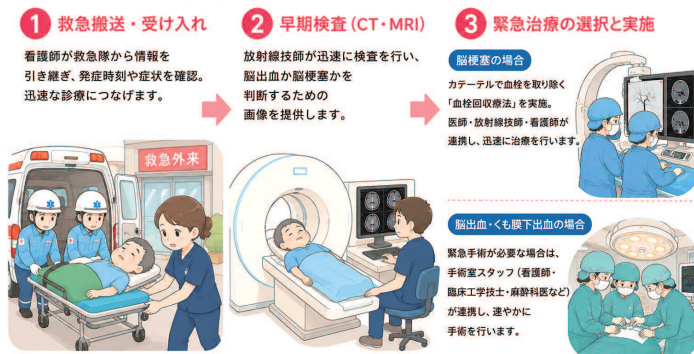
- F** **Face (顔)**
顔のゆがみ 顔の片側が下がる、ゆがみがある。
- A** **Arm (腕)**
腕の麻痺 片腕に力が入らない、両腕を上げると片方が下がる。
- S** **Speech (言葉)**
言葉の障害 ろれつが回らない、言葉が出てこない、うまく話せない。
- T** **Time (すぐに)**
すぐに救急要請 少しでも異常を感じたら、ためらわずに**119番!**

一つでも当てはまったら、すぐ行動を!

(図1)

急性期：命をつなぐ迅速なチーム連携

一刻も早い治療が、脳のダメージを最小限に抑えます。



(図2)

◆回復を支えるチーム医療

脳卒中治療は、命を救うだけでは終わりません。大切なのは、「その人らしい生活を取り戻すこと」です。

急性期を乗り越えた後も、看護師は患者さんの体調管理や再発予防の支援を続けます。日常生活への不安を抱える患者さんやご家族に寄り添いながら、退院後の生活を見据えた支援を行っています。

『看護師とリハビリスタッフが連携し、食事や歩行などの日常生活動作を評価しながら、患者さんの社会復帰を支援しています。』

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師として、再発予防や退院後の生活を見据えた支援を行っています。』

リハビリスタッフ(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)は、歩行や手の動きの回復、食事や着替えなどの日常生活動作の練習、言葉や飲み込みの訓練を担当します。早期からリハビリを開始することで、身体機能の回復だけでなく、寝たきりや合併症の予防にもつながります。

薬剤師は、再発予防に欠かせない薬剤の管理を担当します。抗血栓薬や降圧薬などの服薬指導、副作用の確認、飲み合わせのチェックを行い、安全で継続的な治療を支えています。

医療ソーシャルワーカー(MSW)は、介護保険や福祉制度の利用支援、転院や施設入所の相談、自宅退院に向けた環境調整などを行います。患者さんやご家族が安心して新たな生活をスタートできるように支える重要な存在です。

◆最後に

脳卒中を経験した患者さんは、「また歩けるだろうか」「食事ができるだろうか」「家に帰れるだろうか」といった不安を抱えます。しかし、迅速な急性期治療と多職種による継続的な支援によって、多くの患者さんが新たな一歩を踏み出しています。

脳卒中になっても、すべてが終わるわけではありません。私たちは患者さんとご家族に寄り添い、「その人らしい生活」を取り戻すための支援を続けています。



実際の治療の現場 左：カテーテル治療 右：手術



内視鏡的嚥下機能検査



多職種カンファレンスの様子



脳卒中認定看護師
矢野 莉恵

お仕事紹介 薬剤部 PART 2

栄養サポートチーム(NST)を
ご存じですか？

薬剤部 河島 知子

私たちの病院では、患者さんがしつかり栄養をとり、元気に回復できるよう支える専門チーム「NST (Nutrition Support Team)」が活動しています。

◆NSTとは？

NSTは、医師・看護師・管理栄養士・薬剤師・検査技師・リハビリスタッフなど、多職種が協力して患者さんの栄養状態を改善するチームです。栄養状態を良好に保つことは、治療効果を上げることに大きな役割を持っています。

高齢化が進む今、低栄養は「体力低下」「褥瘡」「感染症」などのリスクにつながります。また、近年では「肥満症」も問題となっていて、糖尿病や高脂血症といった病気だけでなく、重すぎる体重が腰痛やひざの痛みを助長しているケースも少なくありません。

NSTは、こうした問題に栄養面から取り組み、年齢・身長・体重、疾患などに応じて分析を行い、患者さんにあった必要なエネルギーや必要な栄養素を管理し早期回復・治療を進めていきます。

◆参加している職種と役割

●医師

患者さんの病状をふまえて、どんな栄養のとり方が最適か方向性を決めます。チーム全体をまとめ、治療と栄養のバランスを調整します。

●管理栄養士

食事量や体重の変化を見ながら、患者さんに合った食事や栄養補助食品を提案します。食べやすさの工夫や栄養バランスの調整を行う“食の専門家”です。

●看護師

日々の食事量・嚥下状態・体重など、患者さんの情報をチームに伝えます。現場の中心として、他職種との連携がスムーズに進むよう調整します。

●薬剤師

点滴や経腸栄養など、患者さんに適切なものか、適切な量かを確認します。薬と食べ物の相互作用をチェックし、安心して栄養をとれるよう支えます。

●臨床検査技師

血液検査などのデータを整理し、栄養状態を客観的に評価します。回診に同行し、患者さんの状態を直接確認します。

●リハビリスタッフ(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)

飲み込みの状態を確認して、食形態(食事のやわらかさや大きさ、調理方法など、食べやすいように工夫された食事の形)の提案も行います。また、体力や姿勢を整えたり飲み込みの訓練を行い、安全に食事ができるようにサポートします。



*日本臨床栄養代謝学会の「NST専門療法士」を取得したスタッフもいます。

NST専門療法士とは、国家資格を持つ医療スタッフが、栄養についてさらに専門的な研修と試験を経て、栄養管理に関する高度な知識と技術を身につけた証として認定されます。

◆主な活動内容

1週間に1回集まって、以下のことを行っています。

●NST介入が必要と思われる患者さんの選定(栄養スクリーニング)

入院時の栄養評価、検査値、床ずれの有無などから、支援が必要な方を早期に発見します。

●栄養評価(アセスメント)

低栄養状態の患者さんや病棟から依頼があった患者さんの栄養状態を確認します。

体重・血液検査・食事摂取量などを基に、どのくらい栄養が摂れているかを確認します。

●栄養ケアプランの作成

患者さんの状態に合わせた食事内容の調整、点滴・経管栄養の検討などを行います。

●回診・カンファレンス

多職種で病棟を訪問、患者さんの状態を共有し、最適な栄養方法を検討します。

●モニタリングと効果判定

栄養介入の効果を確認し、必要に応じて改善策を検討し提案します。

◆NST活動による効果

回復力の向上

褥瘡や感染症の予防

食事が楽しめるようになる

在院日数の短縮

QOL(生活の質)の向上

患者さんの「食べる力」を支えることは、治療の大切な一部です。

NSTは、患者さん一人ひとりがその人らしく回復できるよう支えるチームです。これからも地域の皆さんの健康を守るため、栄養の視点からサポートを続けていきます。



ゴーヤ(にがうり)は、古くから沖縄で食べられてきた野菜で、熟す前の未熟果を食べます。旬は7~8月。苦瓜(にがうり)の名前の通り皮に苦みがあります。薄切りにして、炒め物、酢の物、揚げ物などにします。ビタミンCが豊富で、ミネラルも多く、発汗作用があるので夏のスタミナ野菜といえます。苦みの少ない白いゴーヤも出てきています。

◆ゴーヤ(にがうり)の酢物

材料(4人分)

ゴーヤ……………	120g	かつお節……………	適量
薄切り玉葱……………	40g	醤油……………	8g
		ゆず酢……………	4g

つくり方

- ① ゴーヤは縦半分に切り、スプーンで種とわたを取って2~3mm幅に切り水にさらし、塩を加えた熱湯でさっとゆでて取り出す。玉葱は薄切りにして水にさらし苦みを抜く。
- ② ボウルにゴーヤ、しぼった玉葱を入れ、醤油、ゆず酢を加え和える。
- ③ 器に盛り、好みでかつお節をちらす。

苦みの取り方：薄切りにしてから5%くらいの塩水を加え、軽く混ぜてから10分ほどおきます。塩でもむよりも食感とほどよい塩味が残ります。水気をよく拭き取ってから使います。他にも塩をまぶす、塩+砂糖をまぶす、湯通し、電子レンジなどの方法もあります。

ポイント
苦みで食欲増進
夏バテ防止にも





相談支援センター 医療相談室

医療相談室 主任 大井 聡

医療と福祉をつなぎ、少しでも安心して次の一歩を踏み出せるようお手伝いします。

医療相談室には、室長1名と医療ソーシャルワーカー(社会福祉士)7名が在籍しており、今年4月には新たに2名が加わりました。

私たちは、患者さんやご家族が安心して治療や療養に専念できるよう、医療・福祉の専門職としてさまざまな相談支援を行っています。医療相談やがん相談、退院支援、転院相談をはじめ、地域の関係機関や院内スタッフと連携しながら、一人ひとりの状況に応じた支援に努めています。

お困りごとやご不安なことがありましたら、お気軽に病院棟1階⑤「総合相談」までお声かけください。

◆医療相談

病気やけがによる入院・治療は、身体面だけでなく、経済面や心理面、生活面にもさまざまな影響を及ぼします。医療ソーシャルワーカーは、医療費や生活費に関する不安、介護や福祉サービスの利用、仕事との両立など、患者さんやご家族が抱えるさまざまな悩みや課題についてご相談をお受けしています。

◆がん相談

当院は地域がん診療連携拠点病院として、がんの診断から治療、療養生活、緩和ケアに至るまで、幅広いご相談に対応しています。がん治療に伴う生活上の不安や就労に関する悩み、利用できる制度のご案内など、患者さんやご家族の状況に応じた支援を行っています。また、他院の医師に意見を求める「セカンドオピニオン」についてもご相談いただけます。

◆退院支援

入院治療後、身体機能の低下や障がいの影響により、退院後の生活環境の見直しが必要となる場合があります。当院では、各病棟に専任の医療ソーシャルワーカーを配置し、患者さんやご家族と一緒に退院後の生活を考えながら、介護保険や福祉制度の活用、自宅復帰や施設利用に向けた支援を行っています。

◆転院相談

近年は医療機関の機能分化が進み、一つの病院だけで治療を完結することが難しくなっています。当院は急性期医療を担う病院として、急性期治療が終了した後も継続的な治療やリハビリテーションが必要な患者さんに対し、地域の医療機関や施設と連携しながら、適切な転院先をご案内しています。



着任医師紹介

住友別子病院では、2026年度新たに6名の常勤医師と3名の初期研修医が入職いたしました。

今後も引き続き、地域に必要とされる医療機関を目指し、職員一同患者さんご家族に寄り添った医療の提供を心がけてまいります。よろしくお願いいたします。

呼吸器内科	上田 創先生	茅田 祐輝先生
消化器内科	近藤 莊先生	
外科	高木 健次先生、高本 真澄先生	
泌尿器科	信森 翔太先生	
研修医	迫田 義輝先生、井上宗一郎先生	
	石川 貴大先生	



第5回 防災イベント

谷野宮 周博

住友別子病院労働組合では、今年4月に恒例行事となった「第5回防災イベント」を開催いたしました。新居浜市防災センターおよび消防署の皆さんのご協力のもと、実践的な体験を通じて防災意識を高める貴重な機会となりました。

■ 防災センター：災害の脅威を肌で感じる

防災センターでは、震度7の激しい揺れを体験。立ってられないほどの衝撃に、日頃の備えの大切さを改めて実感しました。また、火災時の煙避難体験では、暗闇の中で避難灯だけを頼りに進む難しさを学び、初期消火訓練では消火器の正しい扱い方を習得しました。

■ 消防署：プロの技術とはしご車の迫力

消防署では、ポンプ車や救急車の車両説明に加え、重い防火服の着用体験や迅速な出動準備の様

子を見学。消防士の方々の厳しい訓練と責任の重さに触れることができました。地上40mまで高く伸びるはしご車には、参加した子どもから大人まで驚きの声を上げていました。

近年、全国各地で自然災害が相次いでいます。本イベントが、一人ひとりが「自分と家族を守るためにできること」を考えるきっかけとなれば幸いです。ご協力いただいた関係者の皆さんに心より感謝申し上げます。





2026年5月16日

組合旅行(神戸中華街)

仙波 朋子

組合婦人部は、組合旅行の企画を行っています。新型コロナウイルスが少しずつ収束してきたなか感染対策を徹底し2023年度から組合旅行が再開されました。恒例のUSJから趣向を変えて2パターンの組合旅行の企画をさせていただきました。5月16日は、神戸中華街旅行が企画され五月晴れのなか参加者15名で日本中華街の一つ南京町を目指し出発しました。

昼食は中華菜館龍郷で円卓を囲み本場の中華9品を堪能。珍味のピータンにも皆さん挑戦し、さまざまな意見が飛び交い和気あいあいとした時間



を過ごしました。ランチの後は南京町街ブラです。甘いもの片手に中国風の街並みを散策し見るもの全て魅力がありました。集合写真は写真スポットの小財神人形まえて撮影しましたが、あずまやが5月下旬まで修繕工事で見ることができず残念でした。次は場所を移動しIKEA神戸店でのショッピング。家具や生活雑貨がとても豊富で買い物を満喫し神戸をあとにしました。

次回は6月6日の「大塚美術館」鑑賞とアヲアオナルトリゾートでのピュッフェランチ、うずの丘大鳴門橋記念館を企画しています。ご参加してくださった方ありがとうございました。これからも職員のつながりを深める企画を目指していきたいと思しますので、ご参加ご協力のほどお願いいたします。



春風を切る走る！

当院サイクリングチーム「SBCC」活動報告

菅 隆彦

SBCC (Sumitomo Besshi Cycling Club) は、部署の垣根を越え、医師、看護師、薬剤師、放射線技師、臨床検査技師、事務職などさまざまな職種が集まって、院内の親交を深め多職種連携を図る目的で、2013年に西本名誉院長の号令の下に発足しました。主にしまなみ海道周囲や讃岐うどんめぐりなどの、ゆるポタ(のんびりしたサイクリング)を、年に数回行っています。

「道中で見かける景色や爽やかな風を、気の置けない仲間たちと楽しみ、坂道では励ましあって走行することで、日々の業務の活力になっています」と話されるのは、歯科口腔外科の兵頭誠治先生。「みんなで食べた『ひむろ』のかき氷と『須崎食料品店』のかまたまうどんは、乾いた身体に沁みました」と話すのは経理課の石川さん。

自転車は膝や関節への負担が少なく、

自分の体力に合わせて運動量を調整できる他、有酸素運動としても非常に優秀で、心肺機能の向上はもちろん、四季の変化を感じることでメンタルケアにも最適です。幅広い年齢層の方におすすめのスポーツですので、最近運動不足かも…と感じている方は、ぜひ休日に自転車で近所を散策してみてもいかがでしょうか。新しい景色に出会えるかもしれませんよ。

4月1日から、自転車にも「交通反則通告制度」が適用されました。私たちSBCCは、安全運転第一に、今日も風を感じてきます！



しまなみ海道にて



ゆめしま海道岩城橋にて